

早期新生児におけるSIDSおよび ALTEの全国調査 その1

山南 貞夫 藤垣 陽子
田村 健一 奥 起久子

要約： わが国の早期新生児期のSIDS/ALTEの実態を知る目的で、全国の総合病院1,118施設に一次アンケートを送り、62.6%の回答を得、685施設を解析した。これら施設の合計分娩件数は、年287,135件で、全国年間分娩数の約4分の1であった。SIDS/ALTEは91の施設(13%)で有りとなしと答え、総数は126例で分娩1,000に対し0.44であった。SIDS/ALTEを経験した施設では、母児同室を分娩後早期から積極的におこない、児にモニターを積極的に着ける施設が多かったが、これが原因か結果かは判然としなかった。

見出し語： SIDS ALTE 早期新生児期 母児同室

はじめに

SIDSは月齢2~4ヶ月をピークに発症する。新生児期にも発症するといわれているが、実際のところ、統計などでは月齢1ヶ月以後に限定して発表されることが多く、新生児期とくに早期新生児期のデータを目にすることはまれである。早期新生児期(日齢7未満)あるいは新生児期(日齢28未満)の発症例が統計上除外される傾向がある理由としては、もともとこの時期にはSIDSの頻度が少ないことに加え、B群溶連菌感染症、先天性心疾患や代謝異常などSIDSと鑑別が難しい疾患がその後の時期に比べて紛れ込み易く、かつこのような疾患が多彩にあることなどが挙げられている。

一方、わが国でのSIDSの頻度は分娩1,000に対し0.3から0.7というデータがあり、ほぼ1,000に対し0.5前後ということで諸家の意見が一致している。しかし一部の地域を除いては、剖検で確定されるケースが少ないため、わが国の全体的な実態の把握は現時点では困難とされ、従って欧米などとの比較も行ない

難いのが現状である。

われわれは、わが国の早期新生児期におけるSIDS/ALTEの発症の実態を知る目的で、またこれら産科施設入院中の児では医療機関での死亡という事情から剖検率が他の月齢におけるSIDSよりも高いことが推測され、これらを検討することにより、新生児期以後も含めてのSIDSの本態により近付くことができるのではないかと考え、調査をおこなった。

対象と方法

厚生省健康政策局総務課編集の1992年版病院要覧(医学書院より出版)からすべての総合病院を選び出し、各病院の産婦人科の主任医師宛てに一次アンケートを送付した。

アンケートには1989年1月から1993年12月までの5年間の分娩総数;その5年間に正常新生児に関して入院中にSIDS/ALTEを経験したかどうかおよびその例数;一般的管理として、経膈分娩と帝王切開

分娩それぞれの場合における母児の入院日数、母児同室施行の有無と同室開始日齢、児の主な寝かせ方、児への監視モニター装着の有無とモニターの種類などを質問する項目を含めた。

結果

1,118施設に一次アンケートを送付し、700施設から回答があった(62.6%)。このうち調査期間の1989年から1993年の5年間に分娩を取り扱わなかった施設や産科の標榜を取り止めた施設は15施設であった。これらを除く685施設の回答を分析検討した。

5年間を通しての685施設の合計分娩数は、年平均にすると287,135件で、全国の総分娩数の約4分の1を網羅したことになる。

SIDS/ALTEは91の施設(13%)から発症有りとの回答があり、その総数は126例で、分娩1000に対して0.44の頻度であった。

SIDS/ALTEを経験した91施設と、回答があったすべての685施設とで、新生児の管理方法に違いがあるかどうかを調べた。

初産で経膈分娩の新生児が何日目に退院するかをみたのが図1である。内円はSIDS/ALTEを経験した施設で、外円は総対象施設の分布を表している。ともに丁度半数の施設が6日目に退院させていた。ついで7日目、4～5日目の順で、両群ともこの3グループではほぼ100%を占めた。

同様に帝王切開で分娩した場合の入院日数を図2に示した。両群とも10～15日の入院をさせる施設が大半であったが、9日以内の比較的早期に退院させる施設はSIDS/ALTEを経験した施設の20%に対し、調査施設全体では12%に過ぎなかった。

母児同室をするかどうか、するとすれば何日目かを調べたのが図3、4である。図3は初産で経膈分娩、図4は帝王切開の場合を表し、内円と外円の関係は図1、2と同様である。SIDS/ALTEを経験した施設では、経膈分娩で日齢0～2の母児同室をさせるところが50

%であったのに対し、調査施設全体では43%に過ぎなかった。帝王切開で日齢0～5に同室させるところは、SIDS/ALTEを経験した施設で46%、調査施設全体では42%であった。母児同室をさせない施設はSIDS/ALTEを経験した施設の36%、調査施設全体の45%であった。

寝かせ方を図5に示した。仰臥位のみをとらせる施設はSIDS/ALTEを経験した施設の70%、調査施設全体の65%で、腹臥位のみをとらせるところは前者の7%、後者の4%であった。

モニターを装着しない施設は当然ながら両群とも多く、それぞれ70%、72%であったが、時々あるいはそれ以上に頻回につけている施設はSIDS/ALTEを経験したところの14%、調査施設全体の9%であった。

モニターの種類ではともに約半数の施設がパルスオキシメータを単独または併用で用いていた。

考案

今回の調査により、わが国で少なからずの新生児が早期にSIDSで死亡したり、ALTEを経験していることが判明した。新生児期のSIDSやALTEの報告は内外問わずまれであり、調べた限りでは、PORLB ERGERらの報告とBURCHFIELDらの報告、本邦では岸の9例のレヴューがあるにすぎない。今後注目すべきことと思われる。前述のBURCHFIELDらは早期新生児のSIDS/ALTEの頻度を分娩1000に対して0.5と報告しており、われわれの調査の0.44に近い値であった。

また、岸は本邦の文献から早期新生児のSIDSの頻度を0.025ないし0.027と計算している。われわれのデータは二次アンケートの結果を待ちたいが、岸の計算より上回るものと思われる。

今回の調査では、SIDS/ALTEを経験した施設では、より早期に退院をさせる傾向があり、母児同室を分娩後早期から積極的におこない、児にモニターを積極的に装着しているところが多かった。しかしこれらは原因であるのか結果であるのかは判然とはしなかった。

入院日数（経産，初産，外円は総数，
内円はSIDS/ALTE）

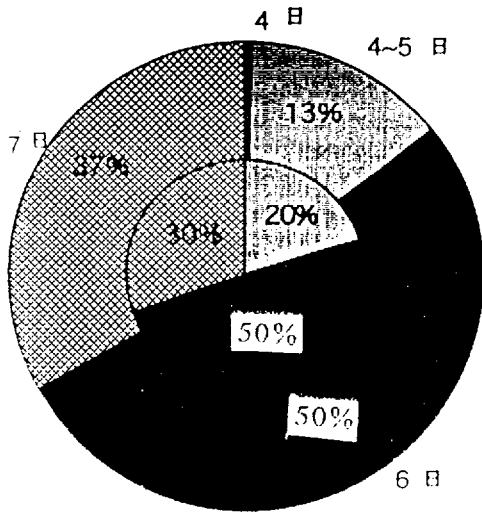


図 1

入院日数（帝王切開

外円は総数
内円はSIDS/ALTE)

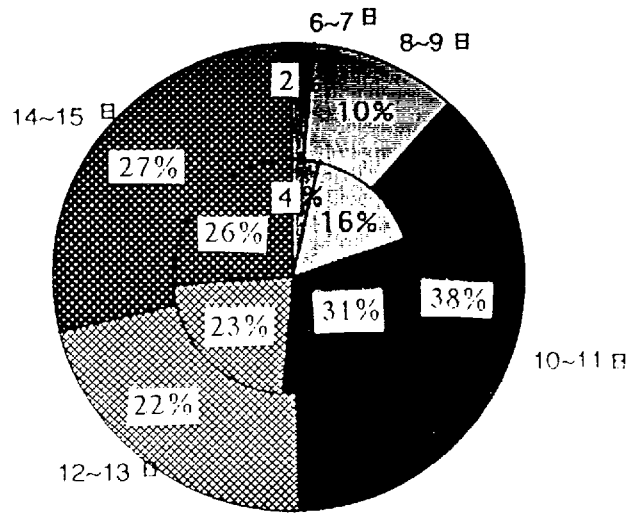


図 2

母児同室日（経産，初産，外円は総数
内円はSIDS/ALTE)

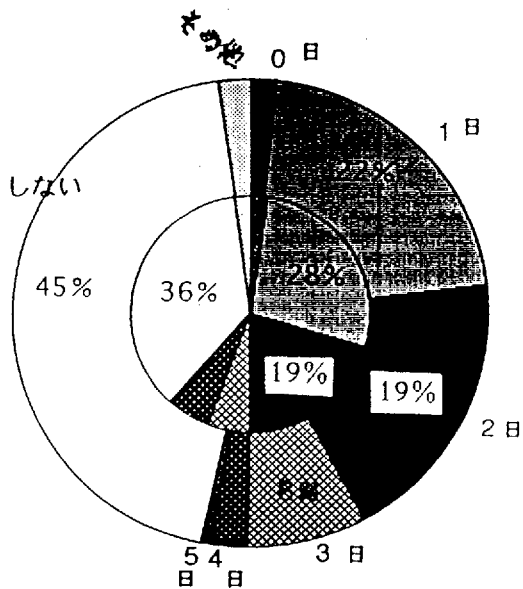


図 3

母児同室日（帝王切開，外円は総数，
内円はSIDS/ALTE)

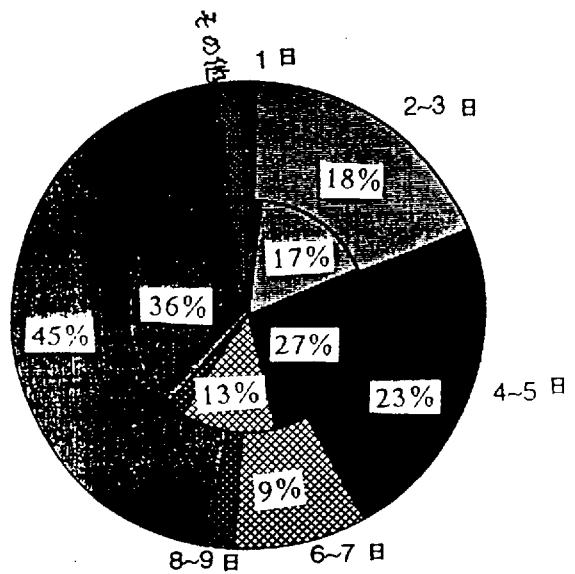
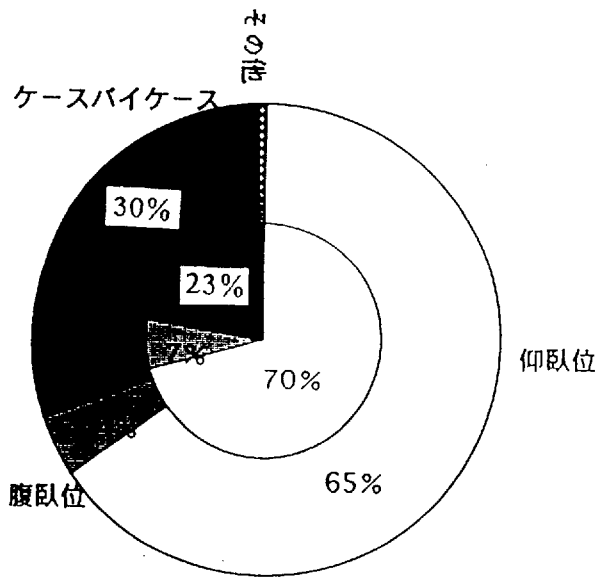


図 4

図5 寝かせ方 (外円は総数
内円はSIDS/ALTE)



個々のSIDS/ALTEの症例の詳細については、すでに二次アンケートの回収に入っており、その分析結果を待ち報告の予定である。

文献

- 1) Polberger S et al. Early neonatal sudden infant death and near death of fullterm infants in maternity wards. Acta Ped Scand. 74: 861, 1985
- 2) Burchfield DJ et al. Sudden death and apparent life threatening events in hospitalized neonates presumed to be healthy. AJDC 145: 1319, 1991
- 3) 岸真司: 産科新生児室発症SIDS. NICU. 5: 995, 1992

図6 モニターの有無 (外円は総数,
内円はSIDS/ALTE)

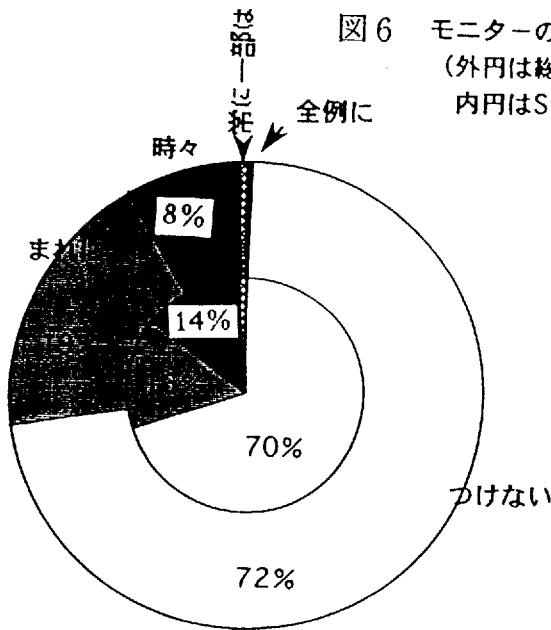
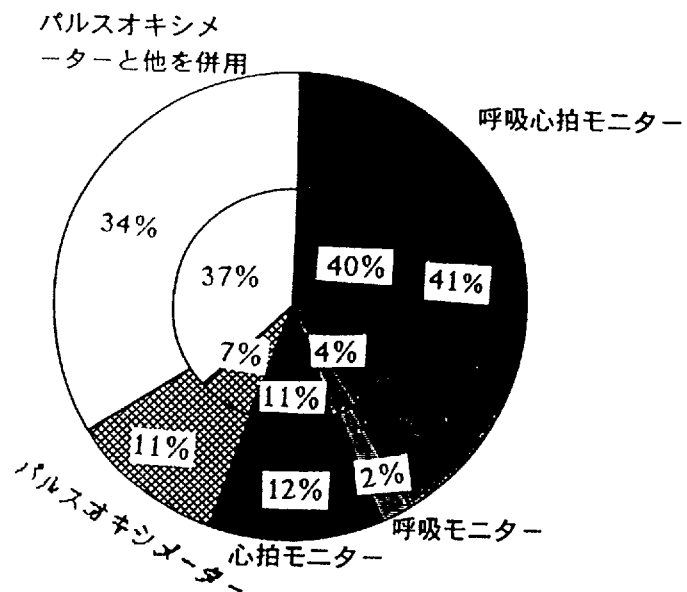


図7 使用モニターの種類 (外円は総数,
内円はSIDS/ALTE)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:わが国の早期新生児期の SIDS/ALTE の実態を知る目的で、全国の総合病院 1,118 施設に一次アンケートを送り、62.6%の回答を得、685 施設を解析した。これら施設の合計分娩件数は、年 287,135 件で、全国年間分娩数の約 4 分の 1 であった。SIDS/ALTE は 91 の施設(13%)で有りと答え、総数は 126 例で分娩 1.000 に対し 0.44 であった。SIDS/ALTE を経験した施設では、母児同室を分娩後早期から積極的におこない、児にモニターを積極的に着ける施設が多かったが・これが原因か結果かは判然としなかった。